

Title	オスカ・ランゲ著 都留重人監修訳 社会主義体制における統計学入門
Sub Title	
Author	佐藤, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.6 (1955. 6) ,p.488(66)- 491(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19550601-0066
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550601-0066">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550601-0066</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本書において採用せる保險概念も、この經濟的必要充足説に屬するものであるが、社會保險をも含めるために、偶然率に應ずる保險料という條件は排棄して「と述べ、この説が最も優れている」という根拠を、「この概念自體の中に保險の内容を明示している」からであるとして、「保險保護の内容は、偶然的事故に際しての經濟的必要を充たし得ることであり、この必要を的確に充たし得る施設は、保險を除いては存在しない」さらに「保險保護の程度、即ち保險の効率を問題とする場合、この經濟的必要充足説に基づいてのみ、満足できる解明が得られる」。つまり現實に發生せる費用または損害と現實の支拂保險金との比としての保險保護の程度は、「これこそ經濟的必要充足説における經濟的必要と、その充足額の比を示すものである」からと述べている。そして「II 保險の概念」に遡つては「生活危險により偶發する一定の經濟的必要(入用)を豫定する多數の經濟單位が、技術的基礎によつて、相互にその必要を充足することとが保險 (Versicherung; insurance; assurance) である」と記している。

大林教授は、上述の意味の「經濟的必要」と云うことを「III 經濟的必要とその充足」にて説明している。まず人保險では「死亡・廢疾・疾病又は負傷によつて惹起された經濟的不利益即ち費用の發生、又は勞働收入の喪失の形をとる」經濟的必要と述べ、財保險では「物財に發生する危險のために關係者に發生する」經濟的必要と記し、「保險にとつて基となるべき價格は、一方において、保險加入者の現實の經濟的必要を賠償し得るものであり、他方において、危險の大きさに相當する保險料を算出し得るものでなくてはならぬ」。「吾々は、それぞれの豫想の經濟的必要と保險料支拂能力とに應じて、保險金額を定め保險を契約する」とし、「經濟的必要を充足するための保險金の支拂

(保險給付)は、その量において必要に應ずるのみならず、その給付の時期において必要發生の形態に應ずることが、保險の保護を一層効果あらしめる」と論じているが、本書全體を通讀しても、入用充足説または經濟的必要充足説に對する一般的な非難、すなわち「需要なきに保險あること」と「需要の大小と定額支拂の間に相關關係なきこと」または「豫定入用と現實入用の差異」等への解答は與えられていない。

さて本書は、保險の實際あるいは實體の解明を中心とし、簡潔平明の表現を用い、數多の實例を提示して、生きた現代の保險の機構を明確にし、冒頭に述べたような所期の目的を一應達してはいるが、隨を得て蜀を望むことを許されるならば、さらに統一的な、體系的な理論的考察を施した保險學理の完成篇あるいは續篇の出現が強く希望されるのである。

著者 大林良一氏 一橋大學教授、B6版、一九〇頁、索引六頁、昭和二十九年六月十五日、弘道館、一七〇圓(庭田範秋) オスカ・ランゲ著 都留重人監修譯

### 社會主義體制における統計學入門

現在社會主義體制を採つていない國の人々は社會主義國で出版された書物を手にした時の一種の軽いサンペンスを感じるものである。經濟學に於てマルクス經濟學と近代經濟學が對立して相入れないものであることは衆知の所であるが、經濟分析に統計的分析が不可能のものとなつた今日、統計學に於てもそのことが問題となる。日本に於ても翻譯書をふくめて統計學云々という表題の書は數多く出版され、その内、殆んどが入門書であるからいきおい内容も大同小異となつてやや過乘生産の氣味かとも思われる程である。本書「統計學入門」もただそれだ

けならば別にたいした注意も引かないだろうが、副題「社會主義體制における」という文字が眼に入る時、自ら別の魅力を發揮することになる。以下本書の特徴を示すと思われる文章をばつすいして行くことにする。ランゲの序言が本書の特色を最もよく示すであろう。「本書は、計畫及び統計専門學校の統計學部の學生のため一九五〇—五一學年度に行つた講義を基礎として作られたものである。私が本書を出版することになつたのは學生や同僚や多數の統計實際家のすすめもあつたが、マルクス・レーニン主義的方法および現代科學の要請に應ずる統計學理論の系統的な教材がポーランドの文獻にないという事實からであつた。本書はこのギャップを特にマルクス・レーニン主義的方法の要請にこたえる點に關する限り單に部分的に充たしては過ぎない。統計學研究の分野におけるマルクス・レーニン主義的方法の收穫は、きわめて大きなものがあつて、その結果も漸次に認識されるにすぎない狀況である。このことについては現在ソビエト同盟で行われている統計學に關するさかんな討論が證明している。この討論はまだ終つていないのであり現在その結果のすべてを豫見することはできない。それ故このテーマについて言われていることや書かれていることの多くが、暫定的性質をもつていふことをあらかじめ心得ておく必要がある。このことは本書に含まれた多くの主張についてもいえるのである。それらの主張は、今後の研究と討論の結果によつて再検討されなければならないであろう。これはあらゆる學問的著作のもつ運命である。私は統計學理論の講義を一貫して辨證法的唯物論の方法論に依據するように努めた。このことはまず第一に經驗批判論またはネオ・ポジティヴィズムの前提から出發するブルジョア統計學者の大多數と異つて、統計學を大量過程にお

### 書評及び紹介

いて作用している因果關係の研究用具として一貫して理解するという點にあらわれている。統計學のこの性格は講義全體を通じてあらわれており、一見極めて抽象的な論理の結論においてさえもそうである。次に私は又統計學理論の講義を史的唯物論およびマルクス主義經濟學の理論に結びつけることに努めた。史的唯物論とマルクス主義經濟學は社會・經濟過程の規則性が、自然界において見られる過程の規則性と質的に異なる特質をもつことを示している。この原理的差異の無視こそは、ブルジョア統計理論の多くの誤解の源泉であり、それは資本主義體制に奉仕する辯護論的「把握」に最もしばしばみられるものである。それ故社會・經濟的大量過程の特質が完全に強調されなければならない。それには社會・經濟統計學をマルクス・レーニン主義社會經濟理論に基礎をおく特殊科學としてすなわちあらゆる種類の高度の抽象段階において大量過程を把える數理統計の一段理論の結果が補助的役割を演ずるような科學として取扱うことが要請される。この要請に應じてこの講義は社會・經濟過程の統計的記述と統計分析だけを對象にしており、この講義の中で展開される一般數理統計の原則はこれらの過程の分析の用具として役立つものである。しかしその他に社會・經濟過程ときわめて密接に關連して講義の中で可能なかぎり解明する必要のある二つの種類の大量過程が存在している。それは農事試験の統計的管理と生産の統計的品質管理の對象となる過程である。農事試験の統計的管理と生産の統計的品質管理は社會の生産力に關連している。そしてそれらは社會經濟的過程の統計的分析——その對象は生産關係とそれに基礎を置く上述の諸關係である。——の重要な補足である。「第一章統計學の對象と課題。第一節大量過程の經過における規則性。個々の場合には規則性が明らかでないにも拘らず、大量においてとらえれば

その規則性を確定し得るような過程を大量過程という名稱で定義する。第二節、統計的規則性と因果關係、大量過程というものは各個の場合には觀察し得ない規則性が大量において把握され明かにされるような過程である、ということが判る。では統計的規則性とも呼ばれるこの種の大量的規則性はどのようにして起るものであろうか。それは或は自然界に或いは人間社會に生起する過程においてあらゆる場合に全く同一の一般的諸原因が作用する際、並びに、それ以外に各個の場合、更に場合毎に異なる特殊の付加的原因が作用する際、に起る。大量過程に形勢を及ぼす諸原因は、これを二つのカテゴリーに分けることができる。その一つはあらゆる場合において作用する主原因とわれわれの呼ぶものであり、他は單にそれぞれの個々の場合にのみ作用する、副次的原因とわれわれのよぶものである。

第三節統計學の役割—ここではレヴィソンの言葉が引用されているが、要旨は個々の事實でなく研究課題に關連のある事實を一つの例外もなく全體としてとり上げなければならぬということである。第四節大量過程の構造—一般に大量過程においては系統的因子ならびに偶然的因子の二つの因子が區別される。系統的因子とは主原因群の作用の結果である部分の大量過程であり、偶然的因子とは副次的原因の作用の結果である部分である。第五節偶然性と必然性—一般的に副次的原因の作用の結果とは偶然という名稱で定義する。……次の二つの事を認識することである。第一は偶然は因果關係の缺如を意味しないことである。それどころか偶然は、ある原因、主原因の體系と結びついていない副次的原因の結果である。第二には偶然是客觀的に起るものであつて、ある人々が考へていないように、原因を主觀的に認識しない點にあるのではないということである。というのはすべては必然であり、偶然を云々するのは原因を知ら

次年度の計畫引上げの可能性はどうか、といったことを確かめる。このため統計的分析は經濟の社會主義的計畫化の不可欠な用具である。第一節統計學史の基礎的知識、最近のソ連統計學者の名がでてゐる、第二節辯證法的・史的唯物論に照してみた統計學、統計への正しい接近法の基礎をあたえるものは辯證法的唯物論と史的唯物論でありなかつてマルクス主義經濟學の理論である。辯證法的唯物論は因果關係の理論をあたえるものであり、特に必然性と偶然性を因果關係の二つの異なる種類として把握するものである。このような把握が統計的規則性の前述の自然分析の基礎をなすのである。第一三節統計と經濟學、經濟學こそが統計調査のプログラムを設定し、回答を求めめる問題を定立する。第一四節統計調査の手續、調査の結果を經濟統計は國民經濟バランスの形における經濟表として綜合的に把握する。以下第五章二三〇頁迄つづくのであるが、その中にはノルマと豫測の問題、つまり普通の豫測の意味が成立つかどうか。或は傾向線の當嵌めは良いとしてもロジスチック曲線の當嵌めは妥當であらうか等、好學家の興味をそそる問題が豊富に並んでいる。それを別にしても上のわずかな引用によつて既に讀者は充分の興味を感じられたであらう。そして成程とうなづかれるに違いない。(そのうなづきかたに千差萬別があらうとも)。いづれにせよ冒頭に於ける二〇頁のふんいきはその後の二〇〇頁を讀ませる力をもつてゐることは多くの人によつて知られてゐる所の事である。(佐藤 保)

ないからにすぎない、偶然はわれわれの單なる主觀的無智であるという見解があるからである。この見解は誤謬である。偶然是所與の副次的過程の原因、確認することのできる原因、の作用の客觀的結果である。これらの原因を認識することによつて副次的原因の結果が偶然でなくなるわけのものではない。第六節大數法則、副次的原因の結果、或いは偶然的な偏差は、大量の数が大きい程、即ち調査する場合の数が多ければ確實に消去される。そこでこの場合大數法則が作用しているといふのである。第七節大量過程の種類、大量過程は社會現象の分野において最初に觀察せられそこに最も明瞭にあらはれてゐる。しかしまた自然に於ても、生物現象や物理學の法則に示される。第八節社會・經濟的大量過程、各個人、各個人グループならびに各社會階級の活動は一定の主原因群によつて決定づけられておりそれが二つの活動を規定し、歴史的規則性の基礎をなすのである。しかしながらこれ以外に多數の副次的原因があるのである。そのため社會的・歴史的過程に現われる規則性は統計的性質をもつこととなる。第九節資本主義經濟における大量過程の自然發生性、無計畫性といういみである。自然發生的な過程である景氣の推移が示される。第一〇節計畫經濟における大量過程、計畫經濟といへども統計的大量過程である。社會主義的計畫經濟においては定められたノルマと、その超過遂行のための組織的闘争との結果である系統的因子と、各工場、各職場、各労働者によつて異なる副次的原因の結果である偶然的原因とその兩者から成立つてゐるのである。統計は二つの機能を遂行する。即ち計畫化の基礎を提供すると同時にそれは計畫遂行のコントロールの基礎である。この計畫遂行のコントロールは單に達成率が計畫以上であつたか以下であつたかを確認するだけでなく、なぜ計畫が完遂されなかつたか、またなぜ超過遂行されたか、

第四十八卷 第七號 目次

地主制再編成の一形態……………小池基之

投入算出分析(2)……………福岡正夫

書評及び紹介

經濟學關係文獻目錄

本年上半年總目錄